広葉樹に魅せられて

広葉樹の新製品開発に意欲を燃やす

竹内久弥さんに聞く

竹内木材工業合資会社社長
旭川地方広葉樹協同組合理事長

聞く人　北海道林材新聞社旭川支社
次長　上畑正和さん

北海道立林産試験場
林産化学部長　峯村伸哉さん

――竹内木材さんは，創業以来，半世紀にわたって，広葉樹の暖簾(のれん)で社業を繁栄しておられますが，社長さんにとって，広葉樹の魅力とはどんなものか，今までの歩みも含めてお聞かせ下さい――

うちの会社は，今年で創業67年になりますが，先代は10年～15年位は針葉樹も取り扱っておりました。広葉樹をやりだしたのはそれ以降ですが，北海道の広葉樹は樹種が多く，質的にも用途の面でも範囲が大変広いだけに，やりようではいろいろな道があるわけです。

広葉樹を取り扱っての魅力は，丸太１本挽き立てても，墨付技術によっては付加価値を高めることができるということです。それだけに，従業員への木取りの技術教育は一番大切な問題になってくるわけです。

当社では，戦前戦後にわたり，電柱の腕木としてすぐれているナラを電力用，通信用として，全国的に一手製造販売をしていた関係もあり，現在はこれが金属品に替わりましたが，角物木取りの技術が良いせいか，輸出，国内とも年間相当量の受注出荷をしています。また，戦前からナラ，タモ，カバは権威のある建物，国会議事堂，裁判所，教会等の内装材また造船材，車両材等，家具材以外にもその用途は広かったわけです。

戦後，外材が入るようになり，日本の商社が外国を探せば道産広葉樹と同等以上のものがあるだろうと探し回ったが，類似品はあっても道産広葉樹のミズナラ，ヤチダモ，マカバのような高品質のものは，いまだにみつかっていないのが現状です。

――木材産業は天然の資源産業ですから，やはり長い目でとらえていく必要があると思います。その中で，木材の将来を最大限に生かしていく着想が大事だと考えますが，その点で竹内木材さんは工芸，民芸面など本当にユニークな経営をしておられて，その企業特質に関心を寄せている人が多いと思います――

10年位前から，工芸品とか民芸品を考え出しま

した。昭和45年頃，北海道の広葉樹が売れなくて非常に困ったことがありました。私も旭川地方広葉樹協同組合の責任者をやっていまして，専務理事と全国の家具木工団地を一カ月ばかり回って，北海道の広葉樹を売るべくＰＲしてきたわけです。

その時，どの木工団地へ行きましても，年配の方や昔の職人さんは，ナラを中心にした道材を使ったといっておりました。

ところが，戦後，外材ブームが来て，マスプロの工場が出現したため，量的な生産性ばかりあげる結果になり，どんどん外材が使われて，道材はほとんど使われないようになりました。しかし，その当時ですら，問屋，デパート，またどこの木工団地でも，店の宣伝用にもなるので無垢の物を作ってほしいという要望があり，そこで，丸太を縦にしたり，横にしたりして考えついたのが斜面の年輪板なわけです。しかし，ご存知のように丸太を輪切りにした円盤は普通の乾燥では必ず割れるために，この商品化までの苦労は大変なものでした。幸いあの48年の岩戸景気で研究費が計上出来まして，これが動機で次の色々なものを手掛けることになったわけです。

私は，いつもこう考えているのです。木材関係は何をやるにしても，知識や施設の基盤がありません。したがって，何か外のことをやるときに，一本勝負をかけてはいけないと思います。逐次10年後あるいは20年後を目途にして，段階を踏みながらいくべきだ，というのが私の持論です。

現在，色々な工芸品も広範囲にやっていますが，埋もれ木もその１つです。私が埋もれ木を始めましたら，２，３年後に他の方も真似されて市場に出してきましたが，長くは続きませんでした。

私は失敗を繰り返し，成功するまで商品を市場に出しませんでしたので，販売を始めて８，９年になりますが今だにクレームはほとんどありません。現在，道内で埋もれ木を生産しているのは私のところ一軒です。

有名な話ですが，長野の松本民芸が５，６年前大変なブームになり，大手デパートが現金を積んでも仕入れが出来なかったといいます。この社長さんと会いましたが，今日の日の目を見るまでに15年間苦労したといってました。この話のように，パイオニアには長期の苦労が伴うわけです。

正に新製品の開発は，ローマは一日にしてならずです。

これから，木材関係で色々なことをやる方は，この辺りを考えてゆかねばならないでしょう。一見，消極的なようですが，心すべきことと思います。私自身はチャンスは必ずあると自分にいいきかせながら，努力するようにしております。

――企業の経営者というのは，常に新たなことを考え，何かをやってみたいという，前進的なものの考えの人が多いと思いますが，竹内社長さんは，広葉樹の心を製品によく生かしておられるのに敬服しております――

それほどのものではありませんが，年輪板は人のすすめもあって，製品化したものです。特許が２つ，意匠登録はかなりの数にのぼっています。

お蔭で知事賞もいただきました。発明協会の理事をおおせつかっているのと，広葉樹の利用を多少考えたということででしょうが。

これらの新製品開発は，自分が30年も40年もやってきた木を対象とするからできるのであって，木に関係しないものをやれといわれてもできません。

広葉樹の道管ひとつを見ても，タモやニレに太い道管があるとか，あるいは埋もれ木１つをみても雑学的に沢山覚えさせられることがあります。

学問的ではありませんが，永い自分の経験から

埋もれ木を素材にしたビュロー

ウッディ エイジ

して「ハァー，なるほど」と思うことがたくさんあります。例えば，木を挽くとき，元から挽くとなかなかのこが通らないが，裏から挽くと通る。これも道管の仕組みの問題などがあるんだということが良く分かるし，埋もれ木などいじると道管というものが，いかに大事なものかが分かります。斜面板も同じことです。

このようなことに，自分の経験を生かして意欲的に趣味をかねながらやると，学者や有識者の話も聞けて非常に楽しいことも多いものです。

木材屋は，木とともに楽しんでいることが一番でないですか。特に，広葉樹は非常に楽しみ甲斐のある木です。

――竹内社長さんの長年の経営を見せていただくと，独特の“竹内式ヒットシリーズ”とでもいうべきアイデア商品が色々ありますが，徐々に変化してきている資源事情なども考え合わせ，今後の方向はどうですか――

何かネックがあれば，それを打開することを考えねばなりません。今後は，ナラを中心とした広葉樹の老齢過熟木が多くなり，材色も悪くなると思います。これを，ある程度漂白処理してゆけば，まだまだナラ材の資源を有効に活用できます。

赤や黒っぽい濃色のナラであれば，市場を失う場合もあるので，表面からわずかの深さでいいから漂白を可能にしていくという技術が欲しいですね。そうすれば流行にものっていけると考えます。

ナラ材は高価なものですから，少々の処理経費がかかっても漂白ができれば，他の樹種と違ってペイできます。これができれば，ナラの用材としての使用量は倍増できることになるのではないですか。この点の研究をぜひ林産試験場にお願いしたいと思います。

漂白と同様に，材面の硬さを高める研究も林産試験場にお願いしたいと思います。木というものは，最終的には塗装のいかんに帰結されると思います。家具用木材でも悪いものは，塗装によるほかありません。こういう面を研究するのは，木材屋の本来の分野でもある訳です。

――峯村部長さん，この点はいかがでしょう――

〔(峯村；調色（漂白，着色）は大変大事だと思います。ナラに限らず淡い材色にしておくと，非常に多様性が高まります。

現状では，調色にかかる処理費がまだ割高なので，良く売れる分野でなければ採算に合わない面があります。特に，ナラは貴重な材なので，今後益々必要性が高まるでしょう。試験場としても，これまでいろいろやってきておりますが，今後とも積極的にこの問題をとり上げて研究してゆきたいと考えています。〕

――広葉樹も低質化しつつあり，パルプ材などに向けられる資源が増大しています。短尺材，伐根などの利用を含めて，どうお考えですか――

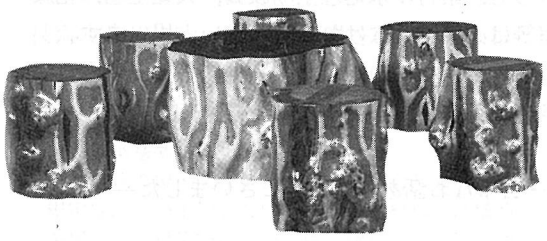
非常に難しい問題ですね。パルプ材も腐朽材では使えませんし，小径材を利用開発してゆくと広葉樹のパルプ材が減少しますが，まだまだ先のことでしょう。

伐根は，山で捨てられている元木で，立木の一番良い材ですから，伐根の生産さえできれば，こんな良い木は無いと思います。

民芸品などは，長さ5～30cm，家具にしても150cm以上の長さは必要ない訳ですが，丸太，製材の生産，運搬の都合上長く取っている訳です。

最近，広葉樹委員会で短尺材も規格材として入れようという考え方がありますが，伐根，短尺材ともに生産されるか否かが問題でしょう。

――先頃の家具展に竹内さんの会社からタモの応



イチイ丸太によるつぼセット

接セットが出品されて注目されていましたが，見通しはいかがですか——

昭和50年頃，ナラの価格が暴騰したので，タモの家具が作られて大変売れたことがありました。

道産タモは，中国，ソ連産のものより白っぽく，塗装もききますし木目も良く，センより硬く傷つきにくいのですが，まもなく値が上がってナラに近づいたので，タモの家具を作らなくなった経過があります。タモよりナラの蓄積が多いし，中国，ソ連産タモの値を上げることにもなるので，北海道のタモをＰＲする必要もないんじゃないかという木材屋さんの考え方もあるようです。

ただ，ナラは高いが，タモでは７掛位の原料価格でできます。現在，私のところ一軒だけタモの家具を作っており，結構評判がよいようです。

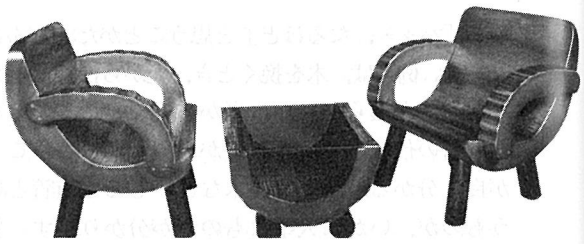
——広葉樹は，樹種が多く特定の樹種が使われると値が上がるので，ほどほどにしておきたいという考えもあるようですが——

現在，日本の家具の５大生産地は，大川，府中，旭川，静岡，新潟ですが，旭川の中でもクルミが良いといって，誰れかがクルミを使うと他の人は手を出しません。それは原料の需要関係で値が上がるからです。

——一般消費者は，材色に紅白があっても，それほど抵抗がないように見受けられ，樹種を問題にするのは，むしろ木材関係者だけということはないでしょうか——

これからの30代の人は，木味があるか否かは問題でなく，機能さえあれば，針葉樹の家具でもよい時代になるかも知れません。将来，単一樹種の高価な家具は，特定の層に限られるのではないかと思います。

——最後に広葉樹の資源が減少し，質がおちてゆくなかで，どう広葉樹を見つめていらっしゃるか，また業界がどのように対応していくべきなのか，



広葉樹丸太の木肌を生かした３点セット

自社の経営も含めて，これからの方向をお聞かせ下さい——

これから二次林もぼつぼつ伐採可能なものが出てきましょうし，私は北海道の広葉樹原料について，それほど心配しておりません。前述の老齢過熟木も，もし漂白が可能になれば，量的に心配はないでしょう。また，小径木，低質材の利用が可能になれば，まだ20年や30年間広葉樹の用材について変化は無いでしょう。

この２年間，道産広葉樹はブームだといわれますが，イタヤ，カツラ，ハンノキとか，まだまだ市場開発の必要な樹種があるわけです。

広葉樹は，色々な商品の開発の仕方，これがポイントになります。その点で，今後林産試験場に対する期待も大きいと思います。

広葉樹は，素材にした場合，鮮度が生命になるわけですから，伐採後ただちにスプリンクラー等による水掛け処理，保管が必要です。水掛け保管材は製材し，天乾，人乾をした場合，品いたみが少なく，乾燥期間が短く仕上がります。また，家具にした場合塗装つや，ソフトな仕上がりなどの点で，水掛けをしない材より数段効果が現れているようです。

広葉樹専門業者は，貴重な資源を有効に使う上からも，素材の水処理土場設備，天乾土場，乾燥室等は必ず備えなければならないと思います。

熱エネルギーの観点から，コストの安い木質燃料の研究などもしてみたいと考えています。

——貴重なお話ありがとうございました——

ウッディ エイジ